

論文内容の要約

論文名	B Cells in Tertiary Lymphoid Structures are Associated with Favorable Prognosis in Gastric Cancer (胃癌における三次リンパ組織内の B 細胞と良好な予後との関係)
氏名	崎村 千恵
<p>【目的】 胃癌における腫瘍浸潤 B 細胞と臨床病理学的因子との関係を検討することである。</p> <p>【方法】 教室で切除した Stage Ib から IV までの胃癌 226 症例を対象に、免疫組織染色により原発巣内および腫瘍周囲における CD20⁺B 細胞の浸潤形態について、CD3⁺T 細胞、濾胞樹状細胞、胚中心 B 細胞、高内皮細静脈も含めて検討した。続いて B 細胞の浸潤量と予後との関係について検討した。</p> <p>【結果】 腫瘍浸潤 B 細胞の多くは CD3⁺T 細胞に囲まれた濾胞を形成していた。B 細胞濾胞内には CD21⁺濾胞樹状細胞を認め、またいくつかの B 細胞濾胞内には Bcl6⁺胚中心 B 細胞を認めた。濾胞周囲には PNA⁺高内皮細静脈を含み、これらの濾胞は Tertiary Lymphoid Structures (TLS) と考えられた。B 細胞高浸潤群では有意に全生存期間が延長した。さらにステージごとに全生存期間を検討したところ、Stage II、IIIにおいて B 細胞高浸潤群で有意に延長し、Stage I、IVにおいても有意差はないものの B 細胞高浸潤群で延長する傾向を認めた。多変量解析において CD20⁺B 細胞高浸潤は独立した予後因子の一つと考えられた。また CD20⁺B 細胞と CD8⁺T 細胞の浸潤量には有意に相関関係を認めた。</p> <p>【結論】 腫瘍浸潤 B 細胞は TLS として胃癌局所に存在し、良好な予後と関係していると考えられた。</p>	